日刊建設工業新聞
2022.3.4付

建築へ Vers Une Architecture

現存する校舎

旧安房南高第一校舎を次世代へ

「よわい92歳」の歴史的建築物 地域住民らが維持保存活動展開

昭和初期に建設された木造校舎が房総半島の南端、千葉県館山市に残っている。旧千葉県立安房南高校（現安房高校）の旧第一校舎は1923年9月の関東大震災後、30年に再建された。校舎としての役割は終えたが、貴重な歴史的建築物を大切に思う地域住民らは、「よわい92歳」と築年数を人の年齢になぞらえ、維持保存活動を展開している。

1930年の完成時の姿

旧第一校舎はJR内房線・館山駅の東側、徒歩で20分ほどの場所にある。両翼に寄棟屋根の教室が張り出した木造2階建て。玄関扉上のダイヤ形装飾、自然石の風合いを表現した「洗い出し技法」による入り口周りの外壁など、随所に凝った意匠や建築技法が施されている。

太い梁を用いて耐震性能を高め、継ぎ目のない長尺材も使った天井、幅の広い廊下や教室などは建設当時のまま残っている。窓ガラスの一部は1960年代に作られた板ガラス。外の景色が波打つようにゆがんで見え、建物の趣を高めるのに一役買っている。

千葉県で2校目の女子教育機関として1907年に開校した「安房郡立女子技芸学校」の校舎として誕生した。最初の校舎は関東大震災で倒壊。震災後に再建した建物が現在残っている。第二次大戦後の学制改革などを経て、61年に女子技芸学校は安房南高校に改称。第一校舎は95年に県の有形文化財に指定された。高校再編で安房南高校は2008年に安房高校と統合。第一校舎は学校施設としての役割を終えた。

■■

随所に光る意匠や建築技法

有志によって保存されている教室

地域の遺産として永続的な保存活用を目指そうと、卒業生や地域住民の有志は17年に「安房高等女学校木造校舎を愛する会」（片方義明会長）を立ち上げた。「女学校ならではの細やかな建築は、女子教育に対する地域の熱量の表れだと思う」と水上順義副会長。閉校まで美術教師として安房南高校で教壇に立ち、校舎をよく知る一人として「女学生たちも熱心に掃除をしていた。階段を滑り台に見立てて、直接段差を滑り落ちて遊んでもいた」と話す。建築家の夏目勝也氏も第一校舎に魅了された一人。「文化財であれ、建物は冷凍保存ではなくライブで使われることが大切」と説く。21年もウェブ講演会で第一校舎の魅力を多くの人に紹介した。

細やかな意匠を持つ階段

第一校舎は千葉県が工事を発注し、大倉土木（現大成建設）が施工を手掛けた。「県の技術職が基本構想を図面化し、建設会社の責任者である棟梁（とうりょう）が女学校を意識して細部に工夫を凝らした。技術者として、また頑固なおやじが若い娘たちを思う心意気で、存分に（技を）発揮したと思う」と、夏目氏は歴史を振り返る。

■■

現在は安房高校が建物の管理者で、愛する会が校舎や周辺の清掃活動、見回りを担っている。市内に残る戦争遺跡や洋画家・青木繁が過ごした住宅の保存活動などを展開するNPOの安房文化遺産フォーラム（池田恵美子代表理事）もサポートする。

池田代表理事は「美術展ビエンナーレを4回開催した。校舎の見学会も開き校舎の魅力と価値を広く発信している」と語る。ただ「19年の台風で屋根が破損し大がかりな修理が必要だった」といい、ここ数年は「コロナ禍の影響もあり活動できていない」と難しい現状を明かす。

現在、第一校舎は健全に維持できている。だが中長期的な対応には不安があり、卒業生も高齢化している。若い世代の理解を得て活動を継承したいという思いはある。「安房高校や千葉県、館山市と検討の機会を設け模索している」（池田代表理事）が、校舎に愛着があり、熱意を持って活動できる後継者は簡単に見つからない。

博物館やアートセラピー（美術療法）の場として活用する提案も寄せられているが、活動資金やマネジメントのノウハウなども必要となる。維持管理や活用に関心を持つ企業とのビジネスチャンスも探る。ただどのような取り組みも県の指定文化財という制約を守ることが前提になる。リノベーションなどで手を入れると保存状態が変わる可能性もある。地域に根差した建築資産を次世代にどう引き継いでいくのか――。地域住民や有志の活動は今後も続いていく。

（写真はいずれも安房文化遺産フォーラム提供）